



「第二次日本経穴委員会」便り

～第10回 運営委員会報告～

第二次日本経穴委員会副委員長・明治鍼灸大学教授 しのはらしょうじ 篠原昭二

去る、3月27日午後3時～5時、日本東洋医学会事務局において第2回運営委員会が開催された。以下、その内容について紹介する。

参加者は、運営母体である全日本鍼灸学会から福村昭先生（監査役兼務）、日本鍼灸師会から小松秀人先生、東洋療法学校協会から川本正純先生、日本理療科教員連盟から吉川恵士先生、香取俊光先生、日本東洋医学会から石野尚吾先生、小林健二先生。さらにオブザーバーとして、日本伝統鍼灸学会より金古英毅先生、日本東洋医学系物理療法学会から藤川治先生が参加した。

当委員会からは委員長・形井秀一先生、副委員長・篠原昭二が参加し、形井委員長の司会で議事の進行が行われた。

2004年度活動報告

形井委員長より、2004年度の活動内容について詳細な報告が行われた。1)日本案の検討作業は二泊三日の合宿も含めて、5月23日～2月13日の間に延べ10回（約100時間）の作業部会を開催した。2)第3回WHO経穴標準化非公式会議（京都大会）を10月12日～14日、明治鍼灸大学において主催した。3)第4回同会議（2005年4月25日～27日：韓国）に向けた準備会を北京において開催し、代表として形井委員長が参加した。4)1月10日朝日新聞朝刊一面

の「経穴の国際標準化の動き」記事に対する種々のメディアの報道に対して、形井委員長、河原委員、篠原委員らがそれぞれ対応した。

この朝刊の与えたインパクトは意外に大きく、テレビ、ラジオ、新聞等で(1)ツボがずれて効果は大丈夫なのか？(2)今までの治療は間違っていたのではないのか？(3)どうして位置がずれるのか…など、多くの素朴な質問が寄せられた（斯界関係の方からは「誤解を招く記事ではないか」といったお叱りも頂戴した）。しかし一般にはツボ、はり・きゅう治療を印象づける恰好の題材として受け入れられた印象が強い。また、インタビューを受けた先生の意図せぬ報道記事になった理由は、記者の印象を主体としたものであり、ニュースソースとしての意外性、問題性のある記事になりがちであることが明らかになってきた。さらに、各委員が切り抜いて持ち寄った新聞記事を見て、唖然となった。それは、同じ日に発刊された朝日新聞朝刊の一面であっても、各地方の編集者によって批判的な論調であったり、肯定的な論調で記述される場合があったりすることなど、思いもよらぬことであった。

2004年度予算及び収支報告

活動費は、運営母体の5団体から200万円、オ

ブザー参加として日本伝統鍼灸学会、日本東洋医学系物理療法学会から20万円、明治鍼灸大学、東洋鍼灸専門学校から29万3000円、医道の日本社、医歯薬出版社、セネファ株式会社、山正株式会社から100万円の協賛金を頂戴し、WHO西太平洋事務局等からのアドバイザー活動費も合わせて、総額447万7611円プラス1640\$で運営された。委員会後、セイリン株式会社からも協賛の申し出があった。

支出の方は、第2回非公式会議(北京大会)が70万3110円プラス400\$、第3回非公式会議(京都大会)が131万8541円プラス700\$、延べ10回の作業部会に関わる交通費、弁当代等99万2665円、その他通信費・印刷費・翻訳料等が9万9535円、返済金:84万6610円であり、次年度繰越金が51万5150円プラス540\$となった。

なお、予算の収支については、福村昭、濱田幸男監査役から厳重な帳簿類および領収書類のチェック並びに監査を戴いた。

2005年度活動計画案

ついで、次年度の活動計画について報告が行われた。活動内容としては、1)4月25日~27日、韓国・大田にて第4回非公式諮問会議が開催される。この段階でほぼ全経穴について位置の標準化作業は完了することになる。

なお、運営委員会において、韓国における会議参加者としてアドバイザー4人、通訳を含む4人のオブザーバーの公式参加が承認された。

ついで、2)7月~8月、ワーキンググループによる英訳作業が行われる。これらの作業と平行して、3)標準経穴書の発刊準備作業が行われる予定である。さらに、4)最終案の検討作業の検討依頼および公式会議開催に向けた準備

が行われる予定である。

国際標準化会議(仮称)の開催について

2005年度の作業を通して、日・中・韓、3カ国の標準化案は完成される。その英訳版が完成した段階で、2006年春または夏頃を目途として、世界標準化会議が予定されている。形井委員長提案に対して運営委員会において種々検討した結果、日本での開催に向けて積極的な対応をすることが決議された。このことは非常に有意義なことであり、準備には相当な困難が予想されるが、種々委員の協力を得て成功させる必要があるということで一致した。

結びにかえて

延べ10回の作業部会は、時には夜11時過ぎまで激論を交わす大変な会議の連続であり、終わった後体調を崩す委員もあった。さらに、作業部会開催の折りに各委員が集まって会議をするだけでは到底作業は間に合わない。そこで、前もって電子メールを使って下準備や資料の翻訳作業など、種々の作業が各委員に割り当てられ、委員会開催日以外でも結構時間をとられる、とてもハードな会であった。しかし、おかげでほぼ全穴の検討作業も終わり、韓国における最終作業を待つのみとなった(それまでにもう一度最終の会議を予定しているが)。あつという間の1年間であったが、各委員に共通して、作業の大変さもさることながら、それ以上に得るところの多い有益な検討会議であったと確信している。この場を借りて各委員に深甚な謝意を表したい。また、終始会の円滑な運営を行われた形井委員長にも深謝する次第である。

(〒629-0392 京都府船井郡日吉町)